

幼児教育・保育における〈こどものうた〉の 歌唱技術の習得に効果的な指導法の一考察

河合 玲子

A Study on Effective Teaching Method for Acquisition of Song Technology of 〈Children's Songs〉 in Early Childhood Education and Childcare

Reiko KAWAI

はじめに

保育に携わる養成校の学生において、必要となる音楽領域のスキルには、ピアノの演奏技術の修得がまず挙げられる。保育の現場では、音楽は子どもたちの活動と深く結びついており、楽しく歌を歌えるように伴奏を弾くこと、リトミックなど保育者の演奏する音楽に合わせて身体表現させること、また一日の生活の流れを保育者の演奏する音楽によって誘導するなど、ピアノ演奏の技術を求められることが多い。ゆえに、本学保育学科でも「保育表現技術(音楽Ⅰ)」の授業において、楽譜の読み方、運指法などのピアノ技術やピアノ技術を効果的に修得するために、読譜指導、楽典といった音楽の基礎理論の指導を行っている。授業は少人数によるグループ授業であり、ピアノ技術の修得は個人レッスンで行うので、学生のレベルに合わせたきめの細かい指導を行うことが可能である。その結果、ピアノの経験者も未経験者も比較的高いモチベーションで授業に参加することができる。特に未経験者や初心者の学生は、弾けるようになる過程を自分自身で客観的に捉えることができるため、技術の向上に積極的にアプローチする学生が多い。

保育者に求められる音楽的スキルにはピアノ技術も大事ではあるが、幼児教育や保育における〈こどものうた〉の歌唱技術もそれ以上に大切なスキルと考える。なぜなら、保育者は子どもたちに歌を教える立場であり、子どもたちは、保育者の歌唱をそのまま真似て覚えるからである。幼少期に記憶されたことは、仮に間違えて覚えてしまったことを修正することはなかなか難しいものである。従って保育者は、子どもの豊かな感性を引き出すために子どもたちに歌を指導する場合、正しい発声と美しい日本語で歌唱する必要があると考える。また、歌唱技術の修得で得られる技術には、呼吸法、発声法、発音法などが含まれる。明瞭な発語は聞き取り易い言葉でもあり、受け手である子どもたちは、〈こどものうた〉の歌詞のみならず、〈言葉〉そのものを学習していく。そして、保育者の心地よい声は、読み聞かせや日常生活の中で、豊かな保育の環境を作ることができる。何より、言葉を習得していく発達段階の子どもたちには大切なことであるといえよう。

保育者となる学生は、ピアノ技術と同様に歌唱についての技術を身に付ける必要があるが、歌唱の技術の場合、ピアノ技術のように客観的に計画的に順序付けて技術を習得できるものではない。何故ならば、自分の発した声そのものを客観的に聞くことができないからである。歌唱は自らの声帯と共鳴器官を使っており、発せられた声の多くは、外耳で捉えた音より、むしろ

る内耳から骨伝道で伝わってくる音を自分の声と捉える。誰でも自分の声の録音を初めて聴いた時、これは本当に自分の声であるのか信じられない感情を持つ。また、他者は自分の声をこのように聞いているということを知り、自分の発した声と他者が聞いた自分の声では異なるということである。自分では正しい発声や明瞭に発音をしているつもりでも、他者に伝わっているかは疑問な場合がある。それは、自分の声を客観的に聞くことができないからであり、発声や発語の修正も自分では難しい。本来ならば、歌唱の技術も個人指導が有効的であるが、授業の時間的な制約のためそれは難しいのが現状である。幸いにも歌唱技術は大勢でも指導が行え、授業の中で正しい呼吸法、発声法、発音法を指導することが可能である。しかし、本当の目的は学生自身が授業外でも歌唱技術の向上のために学びを深められるように導くことであり、そのためには、正しい発声法や発音法、呼吸法を学生自身が自覚できるような指導法の研究が必要と考える。図らずも、保育の現場や実習で〈喉〉を壊してしまう学生、卒業生は少なくない。このような問題を少しでも減らすためにも、客観的な視点に立った歌唱を身に付けるということは、子どもへの保育の技術を向上させるだけでなく、保育者の〈喉〉を守ることに結びつきことから、保育を志す学生が歌唱技術を習得するための研究は必要であると考えられる。

保育学科の学生が歌唱技術の向上につながる指導法について、鼻濁音の指導を糸口に、そこから効果的な指導法を探りたい。

目 的

本学保育学科の「保育表現技術（音楽2）」（以下「音楽2」）では、一クラスを45分の交代制で二つのグループに分け、〈こどものうた〉を中心に〈声楽〉のクラス授業と、〈弾き歌い〉の個人レッスンの授業を行っている。〈声楽〉の授業では、呼吸法、発声法、発音法、正しい音程、リズム感のある歌唱技術の修得、〈弾き歌い〉の個人レッスンでは、ピアノ技術と結びつけた歌唱技術の修得を行っている。

〈声楽〉の授業で、ア・カペラで〈こどものうた〉を歌わせると、随分と低い音程で歌唱する。学生たちは、会話の音の高さをそのまま意識せずに出しているからではないだろうか。〈こどものうた〉は、幼児の音域である一点二音～二点ハ音の音域に合わせて作られている曲が多い。成人女声の会話の音の高さはイ音～一点ハ音（飯田武雄¹⁾：1938、長田淳一郎：1975、pp28）とあるように、学生たちの日常の会話の音の高さの音程と比べると随分高い。従って〈こどものうた〉を歌おうとすると、学生たちは、「声が出ない」、「歌えない」という。〈弾き歌い〉の個人レッスンでは、当然ながら一人で歌唱するのを指導教員が聴く。伴奏部のピアノの音量に比べ、蚊の鳴くような声量で歌う学生が多い。歌唱は幼児の頃より実践していることでもあるが、学校教育の中では、合唱のように皆で声を合わせて歌唱することを行ってきた。一人で歌唱し、人に聴いてもらうという経験は、殆どしていないのではないだろうか。あるとすれば、カラオケの歌唱など、本来の声質とは異なる声質、つまり、電気機器によって音量の拡声や音色の変化された声質である場合が多いのではないかと考える。

授業で学生の歌声があまり聴こえないことから、学生に歌っているのかを確認すると歌っているという。自分には聴こえているからという安心感から、他者も聴こえていると思い込んでいるようである。学生との普段の会話からも感じる事であるが、言葉に対する意識が薄いため、不明瞭な発音で話す学生も多いように感じる。保育者は、子どもたちに言葉を教え、そして歌

を歌って指導しなければならない。子どもたちが正しく歌を覚えられるように、保育者は美しい声と美しい日本語による歌唱力が必要であり、その指導法の研究は大切といえる。

筆者の日本語唱法の研究(河合：2015、2016)は、美しい日本語による歌唱法を目的とし、鼻濁音に注目した研究であったが、鼻濁音を使用することで、「歌唱に気持ちを込められた」、「歌唱しやすくなった」、「声が出しやすくなった」という学生のアンケート結果が多くあった。鼻濁音の指導が学生の歌唱技術の向上に、何かしら良い影響を与えていたといえる。また一つの言葉について注意を払うことで、歌唱全体に影響を及ぼしたと言える。本研究では、学生たちの歌唱に対する意識の調査と共に、学生の歌唱技術を向上できる指導法について模索したい。まずは、格助詞「が」を中心とした鼻濁音の指導を手始めとして、「は」「を」の格助詞の歌唱法にも注目して、学生自身が歌唱の際に、どのように効果があったのかを検証し、その指導法について考察する。

アンケート調査と結果

「音楽2」の授業の受講者43名を対象に、「鼻濁音」についての認知度と、歌唱に対する意識を調べるため、授業開始時にアンケート調査(以下「アンケート1」)を行った。そして授業終了時に、授業の成果を調べるためにアンケート(以下「アンケート2」)を行った。それぞれの結果を1)、2)として報告する。

1) アンケート1

調査時期：平成27年9月29日(火)「音楽2」授業内

調査対象：授業受講生43名(学生：ア～ロ)

設問Ⅰは、筆者の鼻濁音についての研究(河合：2015、2016)でもアンケート調査²⁾をしたが、受講生に対し、鼻濁音という言葉を知っているかという学生を特定するために、鼻濁音の認知度の調査を行った。①知っていると回答したのは、4名(学生：イ、ク、セ、リ)、受講生全体の9.3%であった。②知らないと回答したのは39名、受講生全体の90.4%であった。

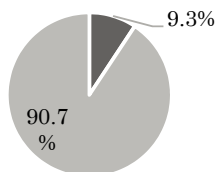
設問Ⅱは、設問Ⅰで知っていると回答した学生を対象に、三題の間(a、b、c)を行った。問aは、その使用ができるかの能力の調査で、①できると回答した学生は2名(学生：イ、ク)であった。これは、鼻濁音を知っていると回答した学生の50%、受講生全体では4.7%であった。設問Ⅰで①と回答しながら設問Ⅱの間aが②できないと回答した学生は2名(学生：セ、リ)であり、鼻濁音を知っていると回答した学生の50%であった。設問Ⅰの②と回答した学生の数と合わせると鼻濁音をできないと回答した学生は、全体で95.3%となった。問bは、どこで鼻濁音を知ったかの調査であり、学生イは「小学校の音楽の授業で教わった」、学生クと学生セは「中学校の合唱練習の時に教わった」、学生リは「高等学校の演劇部の発声練習で知った」と回答した。問cは、鼻濁音に対する印象の調査で、学生イと学生リは「難しい」、学生セは「変な感じ」と回答した。学生クは無回答であった。

鼻濁音に対する認識度を明らかにするため、設問Ⅰの結果を表1、設問Ⅱの結果を表2、また受講生全体に鼻濁音の使用ができるかを明らかにするために表3としてまとめた。

設問Ⅲは、歌唱に対して学生たちがどのような印象を持っているのか、また問題を抱えているのかを探るため、二題の間(a、b)を行った。問aは、①好きか②嫌いかの意識調査を行っ

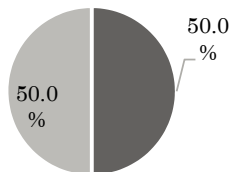
た。①好きと回答したのは、41名で受講生全体の95.3%に及び、②嫌いと回答したのは2名（学生：ネ、ヒ）で受講生全体の4.7%であった。問bは、問aで②と回答した学生を対象に、その理由を記述させた。回答した学生2名（学生：ネ、ヒ）は、「音痴だから」と回答した。

表1 設問Ⅰ 鼻濁音の認知度



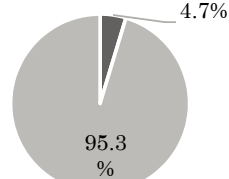
- ①知っている4名
- ②知らない39名

表2 設問Ⅱ 学生の能力度



- ①できる2名
- ②できない2名

表3 受講生全体の鼻濁音の能力度



- ①できる2名
- ②できない41名

設問Ⅳは、主に設問Ⅲの間aで①と回答した学生を対象にしたものであるが、歌唱に対して得意か苦手か、自覚の調査を行った。①得意と回答した学生は9名（学生：ア、イ、ケ、サ、ハ、ミ、ム、リ、ル）であり、受講生全体の20.9%であった。②苦手と回答した学生は34名であり、受講生全体の割合は79.1%であった。その内訳は、設問Ⅲの間aで①と回答した学生32名（学生：ウ、エ、オ、カ、キ、ク、コ、シ、ス、セ、ソ、タ、チ、ツ、テ、ト、ナ、ニ、ヌ、ノ、フ、ヘ、ホ、マ、メ、モ、ヤ、ユ、ヨ、ラ、レ、ロ）と、設問Ⅳで②と回答した学生は2名（学生：ネ、ヒ）であり、それぞれの受講生の回答の全体の割合は、前者が全体の74.4%、後者は4.7%であった。

設問Ⅴでは、学生たちが日頃よりどれくらい歌唱することを実施しているのか、日常と歌唱の関係を調査するために、このアンケートを実施するまでの一週間として調査を行った。①歌ったと回答した学生は30名（学生：ア、イ、ウ、エ、オ、カ、キ、ケ、コ、サ、シ、ス、ソ、タ、チ、ツ、ニ、ハ、フ、マ、ミ、ム、メ、モ、ヤ、ユ、リ、ル、レ、ロ）、受講生全体の69.8%であった。②歌わなかったという学生は13名（学生：ク、セ、テ、ト、ナ、ヌ、ネ、ノ、ヒ、ヘ、ホ、ヨ、ラ）、受講生全体の30.2%であった。その内訳は、設問Ⅲの間aで①と回答した学生が11名（学生：ク、セ、テ、ト、ナ、ヌ、ノ、ヘ、ホ、ヨ、ラ）と、設問Ⅲの間aで②と回答した学生が2名（学生：ネ、ヒ）であり、前者は受講生全体の25.6%、後者は4.7%であった。

設問Ⅵは、設問Ⅴで歌唱した学生30名（学生：ア、イ、ウ、エ、オ、カ、キ、ケ、コ、サ、シ、ス、ソ、タ、チ、ツ、ニ、ハ、フ、マ、ミ、ム、メ、モ、ヤ、ユ、リ、ル、レ、ロ）を対象に、どのような歌を歌唱したのか、記述式による調査を行った。そのため複数回答する学生もいた。ジャンル別に記述した学生の割合が多かったものから、〈J-POP〉が22名（学生：ア、イ、ウ、エ、オ、カ、キ、ケ、コ、サ、シ、ソ、チ、ニ、ハ、フ、マ、ム、モ、ヤ、リ、レ）、回答した学生の73.3%であった。〈好きな歌〉が3名（学生：ソ、タ、ミ）、〈好きなアーティストの曲〉が3名（学生：ニ、フ、ル）で、それぞれが10.0%であった。〈K-POP〉が2名（学生：フ、ロ）、〈ドラマの主題歌〉が2名（学生：ス、ヤ）、〈最近流行の曲〉が2名（学生：ミ、メ）で、それぞれは6.7%であった。〈洋楽〉が1名（学生ロ）、〈童謡〉が1名（学生ア）、〈唱歌〉が1名（学生イ）、〈ディズニー音楽〉が1名（学生モ）、〈CMソング〉が1名（学生ア）、〈高校の吹奏楽で練習した曲のメロディー〉が1名（学生ツ）で、回答した学生はそれぞれが3.3%であった。

設問項目としては設けていなかったが、設問Ⅵの記述欄に歌唱をした場所について明記した学生が2名いた。その内容は、〈カラオケ店〉が1名（学生ル）、〈お風呂〉が1名（学生モ）で、それぞれ3.3%であった。無回答の学生が1名（学生ユ）で3.3%であった。

設問Ⅲの問aの調査結果を表4、設問Ⅳの調査結果を表5、設問Ⅴの調査結果を表6、設問Ⅵを表7にまとめた。そして設問Ⅲの問aから設問Ⅴまでのアンケート結果を表8にまとめた。実施した「アンケート1」は図1である。

表4 設問Ⅲ問a 歌唱に対する意識

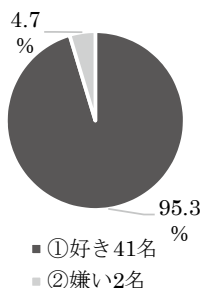


表5 設問Ⅳ 歌唱の実力の自覚

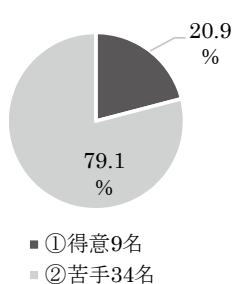


表6 設問Ⅴ 日常と歌唱の関係

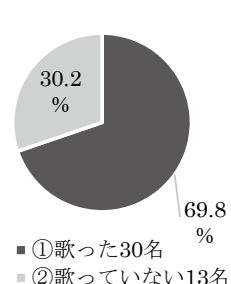
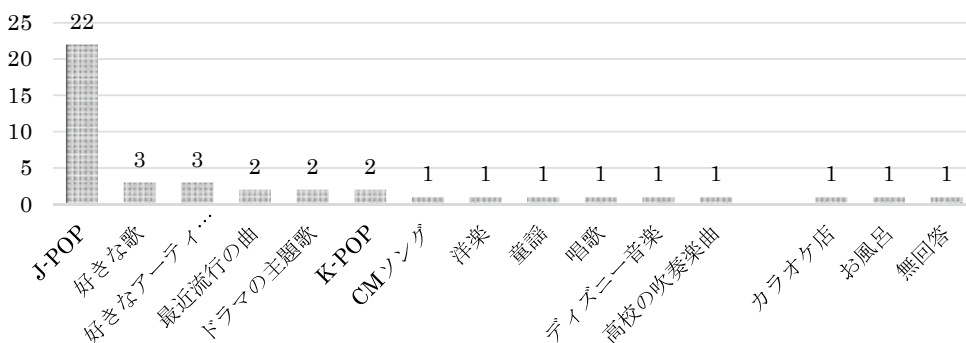


表7 設問Ⅵ 歌唱したという学生の回答の内容

(単位：人数)



■歌唱のジャンル 回答者30名（複数回答あり）

表8 設問Ⅲ問a・設問Ⅳ・設問Ⅴのアンケート結果

	設問Ⅲ-問a	設問Ⅳ	設問Ⅴ
回答内容	①好き 41名 (95.3%)	①得意 9名 (20.9%)	①歌った 9名 (20.9%)
		②苦手 32名 (74.4%)	②歌っていない 0名 (0%)
	②嫌い 2名 (4.7%)	①得意 0名 (0%)	①歌った 21名 (48.8%)
		②苦手 2名 (4.7%)	②歌っていない 11名 (25.6%)
計	43名 (100%)	43名 (100%)	43名 (100%)

「保育表現技術 (音楽2)」日本語と歌唱についてのアンケート1

実施日 平成27年9月29日

次の質問に答えてください。() 内には○で記入してください。

I. 鼻濁音という言葉について… ① () 知っている ② 知らない ()

II. Iで知っている人と答えた人にお尋ねします。

a. その使い方について… ① できる () ② できない ()

b. それはどこで知りましたか？

[]

c. どんな印象をもちましたか？

[]

III. 歌唱について…

a. 歌は好きですか？… ① 好き () ② 嫌い ()

b. 問aで②と答えた人にお尋ねします。その理由は何ですか？

[]

IV. 歌は得意ですか？… ① 得意 () ② 苦手 ()

V. あなたは、昨日までの一週間で歌をうたいましたか？… ① 歌った () ② 歌っていない ()

VI. Vで歌ったという人にお尋ねします。どんな歌をうたいましたか？

[]

ありがとうございました

図1 アンケート1

2) アンケート2

調査時期：平成28年1月12日(火)「音楽2」授業内

調査対象：授業受講生43名(学生：ア～ロ)

設問Iは、平成26年度と平成27年度にも同じアンケート調査³⁾を行ったが、「音楽2」の授業で鼻濁音の技術の修得の追跡調査である。授業開始時にできると回答した学生2名(学生：イ、ク)も含め、受講生43名に習熟度を調査した。その結果は、①授業前からできたが2名(学生：イ、ク)で、受講生全体の4.7%であった。②授業を受けてできるようになったが38名(学生：ア、ウ、エ、オ、カ、キ、ケ、コ、サ、シ、ス、セ、ソ、タ、チ、ツ、テ、ト、ナ、ニ、ヌ、ネ、ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ、ミ、ム、メ、モ、ヤ、ユ、ヨ、ラ、リ、ル、レ)で、受講生全体の88.3%であった。③授業を受けたができないは3名(学生：ノ、マ、ロ)で、受講生全体の7.0%であった。受講生の授業前と授業後の鼻濁音の技術の修得度を表9にまとめた。

設問IIは、鼻濁音の技術を修得するために授業で示した二つの方法、①《言葉の前に「ン」を付けて発音する練習法》と②《口を閉じて「ン〜」と発音することで、鼻に響くポイントを理解し応用させる練習法》について、どちらが当てはまったかを調査した。また他の方法を実施している学生へは、③《その他の方法》として記述させた。①と回答したのは37名(学生：ア、イ、ウ、エ、カ、キ、ク、ケ、コ、サ、シ、ス、セ、ソ、タ、チ、ツ、テ、ト、ニ、ヌ、ネ、ノ、ヒ、フ、ヘ、ホ、ミ、ム、メ、モ、ヤ、ユ、ヨ、リ、ル、ロ)で、受講生全体の86.0%であった。②と回答した学生は6名(オ、ナ、ハ、マ、ラ、レ)で、受講生全体の14.0%であった。③へ回答した学生は1名(学生フ)で、「舌を上あごの奥に付ける」と記述した。この学生は①へも回答していた。①と②の回答率を表10にまとめた。

表9 鼻濁音の授業前と授業後の習熟度(単位：人数)

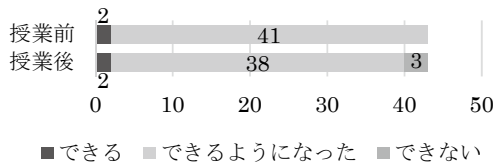
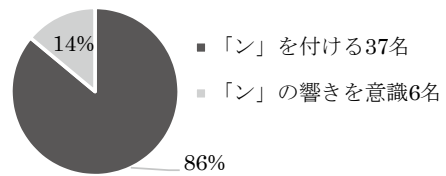
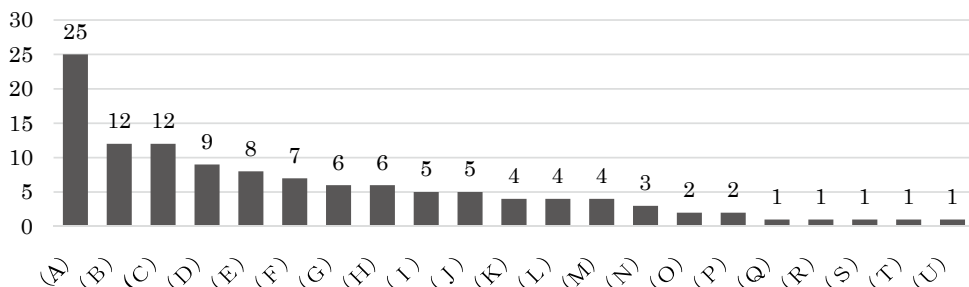


表10 鼻濁音の修得の練習法の回答率



設問Ⅲは、言葉を意識することで歌唱にどんな影響があったのかを目的に調査した。〈こどものうた〉の歌詞に出てくる格助詞「が」「は」「を」を、格助詞「が」は必ず鼻濁音で歌唱するように、格助詞「は」「を」は、発音をする前に口元を小さくすぼめて〈ウ〉を言って発音する方法を指導し、〈ウワ〉〈ウオ〉と発音するように意識させて指導した。そして、〈こどものうた〉を歌唱する際にどの程度意識が浸透したのかを調べるために、問aで授業を受けて意識が変わったかの調査を行った。その内容は、①変わったと回答したのは43名で受講生の全員(100%)であった。問bは、どのように変わったのかを記述させた。その内容をまとめると、(A)歌う時に歌詞の言葉を丁寧に言うように意識できるようになった」が25名(学生：ア、イ、エ、オ、カ、キ、サ、シ、チ、ツ、テ、ナ、ニ、ヌ、ノ、ハ、ヒ、フ、マ、ミ、モ、ヤ、ユ、リ、ル)、(B)「言葉をはっきり歌えるようになった」が12名(学生：セ、ケ、ソ、ツ、ハ、ヘ、ホ、メ、ユ、ロ、ヨ、ラ)、(C)「優しく歌えるようになった」が12名(学生：ア、ウ、エ、ナ、ヌ、ネ、ノ、ヒ、ミ、ム、メ、ヤ)、(D)「きれいに歌えるようになった」が9名(学生：ア、キ、ク、チ、ツ、ナ、ニ、ミ、ム)、(E)「気持ちを込めて歌えるようになった」が8名(学生：ア、オ、セ、ナ、ハ、ム、ラ、レ)、(F)「気を付けて鼻濁音にして歌おうとするが難しい」が7名(学生：サ、ソ、タ、フ、モ、ヨ、ロ)、(G)「鼻濁音を意識するようになった」が6名(学生：ケ、コ、タ、ニ、ヤ、ル)、(H)「歌詞の意味を伝えられるようになった」が6名(学生：ケ、シ、ト、メ、ユ、ヨ)、(I)「自然な言い方に言えるようになった」が5名(学生：イ、ス、ヒ、ホ、ル)、(J)「歌いやすくなった」が5名(学生：ク、ソ、ツ、ナ、ニ)、(K)「表情豊かに歌えるようになった」が4名(学生：カ、ト、ハ、モ)、(L)「お腹で支えて歌えるようになった」が4名(学生：ク、ス、チ、ナ、ネ、ヘ)、(M)「滑らかに歌えるようになった」が4名(学生：コ、ス、ム、モ)、(N)「人の話し方や歌い方が気になるようになった」が3名(学生：ツ、ナ、ヘ)、(O)「普段の会話でも気を付けるようになった」が2名(学生：ス、ネ)、(P)「発声に

表11 設問Ⅲ 問bの記述回答の内容 (単位：人数)



■受講学生43名の歌唱についての記述回答 複数回答あり

気を付けて歌える」が2名(学生:テ、ニ)、(Q)「のびのびと歌えるようになった」が1名(学生カ)、(R)「言葉を丁寧に歌うことで、息が続くようになった」が1名(学生ヨ)、(S)「お腹を使うので音程が取りやすくなった」が1名(学生テ)、(T)「歌う前に歌詞を読むようになった」が1名(学生マ)、(U)「鼻濁音を使用しないが行をあることをしった」が1名(学生タ)であった。これらを図11にまとめた。実施した「アンケート2」は図2である。

(A) 歌う時に歌詞の言葉を丁寧に言うように意識できるようになった (B) 言葉をはっきり歌えるようになった (C) 優しく歌えるようになった (D) きれいに歌えるようになった (E) 気持ちを込めて歌えるようになった (F) 気を付けて鼻濁音にして歌おうとするが難しい (G) 鼻濁音を意識するようになった (H) 歌詞の意味を伝えられるようになった (I) 自然な言い方に言えるようになった (J) 歌いやすくなった (K) 表情豊かに歌えるようになった (L) お腹で支えて歌えるようになった (M) 滑らかに歌えるようになった (N) 人の話し方や歌い方が気になるようになった (O) 普段の会話でも気を付けるようになった (P) 発声に気を付けて歌える (Q) のびのびと歌えるようになった (R) 言葉を丁寧に歌うことで息が続くようになった (S) お腹を使うので音程が取りやすくなった (T) 歌う前に歌詞を読むようになった (U) 鼻濁音を使用しないが行をあることをしった

<p>「保育表現技術 (音楽2)」日本語と歌唱についてのアンケート2 実施日 平成28年1月12日</p>
<p>次の質問に答えてください。() 内には○で記入してください。</p>
<p>I. 鼻濁音の使用について自分に当てはまるのはどれですか？</p>
<p>① () 授業を受ける前からできた</p>
<p>② () 授業を受けてできるようになった</p>
<p>③ () 授業を受けたができない</p>
<p>II. 鼻濁音の技術を身に付けるのに、あなたが一番よかった方法は何ですか？</p>
<p>① () 言葉の前に「ン」を付けて発音していく練習法</p>
<p>② () 口を閉じて「ン～」と発音することで鼻に響くポイントを理解し、応用させて練習方法</p>
<p>③ () その他の方法〔具体的に…</p>
<p>III. こどものうたを歌唱する際、言葉の発音法を学習について</p>
<p>a. 意識が変わりましたか？… () 変わった 変わらない ()</p>
<p>b. 変わったという人にお尋ねします。歌唱はどのように変わりましたか？</p>
<p>[]</p>
<p>ありがとうございました</p>

図2 アンケート2

考 察

アンケート1の設問Iから設問IIまでは鼻濁音について認識とその技術の調査であった。平成25年度と平成26年度入学生の調査²⁾では、鼻濁音の認識の割合は、①知っているが約

20%、②知らないが約80%であった。今回の平成27年度入学者でもこのような数値になるのではないかと予想していたが、実際は①知っていると回答したのは、4名で調査対象者の約10%であり、②知らないと回答したのは39名で約90%であった。〈鼻濁音〉が更に使われなくなっていることがわかった。この数値の変化は、今後ともどのように数値が変化していくのかを研究する必要があるといえる。

設問Ⅱは、鼻濁音の使用についての調査であったが、平成25年度入学生と平成26年度入学生の調査²⁾の結果では、①できるが約2.5%、②できないが約97.5%であったのに対し、平成27年度入学生の調査対象者は①できるが2名で5%、②できないが41名で約95%であった。鼻濁音の指導を受けた学生は、設問Ⅱ問bの記述でもあるように、「小中学校の合唱指導で教わった」や「演劇部の練習で知った」といった特別な指導を経験して身に付けたといえる。学生たちには知る機会が大切であり、そのような機会を増やしていくことが必要とわかった。設問Ⅱ問cは、鼻濁音に対する印象の調査であったが、鼻濁音の技術についての感想が「難しい」、「変な感じ」という回答から、たとえ使用が出来たとしても、日常生活に溶け込むように浸透して使用していることは無いということが明らかになった。

設問Ⅲは、歌唱に対して学生たちがどのような印象を持っているのか、どれぐらい日常生活と関連があるのかを調査する目的で、問aは、歌唱に対する基本的な感情である①好きと②嫌いについて意識調査を行った。①好きと回答したのは、41名で受講生全体の約95%、②嫌いと回答したのは2名で、全体の約5%であった。歌唱は保育者にとって特に重要と考える。95%の学生が歌唱を好きと回答したことは、歌唱技術の向上の上で大切な要素である。②嫌いと回答した学生が2名判明したことにより、授業内でサポートを行うための情報を得ることが出来たといえよう。嫌いには理由があり、その問題を解消することにより、歌唱を好きになる要素が生まれる。その抱えているものが何かを探るために問bにその理由を記述させた。記述には、「音痴だから」とあった。これは、自分の出している音の高さと声帯の筋肉のコントロールがうまく調整できていないだけであり、発声の訓練により克服できる技術といえよう。正しい音程、身体全体を使った発声は、だれでもすぐにできるものではない。歌唱の際、自分の発した声以外の音に対しても、客観的な耳を持ちながら歌唱することに慣れる必要があり、「音楽2」の授業の中で指導の糸口が明らかになった。

設問Ⅳは、歌唱に対して得意か苦手かの意識調査を行った。①得意と回答した学生は9名であり、受講生全体の約21%であった。この学生たちは、人前でも歌うことに抵抗がないと考えられる。歌うことが好きであり、日頃より歌唱しているといえる。逆に②苦手と回答した学生は34名であり、受講生全体の約79%であった。その中には、歌唱が嫌いと回答した学生2名に加え、歌唱は好きと回答した学生32名も含まれていた。保育者は人前で歌唱を行わなければならない。人前で歌唱することに慣れさせること、自信を持たせることを「音楽2」の授業内で実施していかなければならないことがわかった。

設問Ⅴは、学生たちが日頃よりどれくらい歌唱することを実施しているのか、日常的な状況を調査するために、記憶に新しい一週間と期限を付けて調査を行った。①歌ったと回答した学生は30名で、受講生全体の約70%であった。設問Ⅲの歌唱が好き(約95%)に比べると歌唱を行っている割合が低いことがわかった。この結果より、歌唱をするのではなく、歌唱を聴くことが好きといえる。また、歌唱を得意と回答した学生9名(約21%)は、日常の中に歌唱習慣が根付いており、歌唱は苦手であっても21名(約49%)は、生活の中で歌唱の習慣を取り入れていることがわかった。また②歌わなかったという学生13名(約30%)は、普段の生活の中で

歌唱の習慣がないことがわかった。そこには歌唱を嫌いといった学生2名も当然含まれている。

設問Ⅵでは、設問Ⅴで歌唱した学生を対象、どのような歌を歌唱したのか調査を行った。ジャンルでは、J-POP、好きな曲、好きなアーティスト、最近流行の曲、ドラマの主題歌、K-POP、CMソング、洋楽と歌謡曲が殆どを占め、その中でもJ-POP (73%) が圧倒的に多かった。メロディーが好きで好んでいる場合もあるが、日本語の歌詞の曲を好んで聴いているということは、歌詞の意味を理解して心に響くものを好んでいるといえ、歌詞を大切にしているといえるのではないだろうか。聴くことに関しては、言葉を大切にしているといっていよう。

「音楽2」の授業では、鼻濁音を知らない学生が多かったことから、鼻濁音についての資料⁴⁾の配付を行い、その使用法を指導した。また、学生へは、〈言葉〉を大切に歌うための方法として、①「主語」と「述語」で歌詞の大まかな意味の把握をすること、②「名詞」と「助詞」の組み合わせにより文意が変化することから、「名詞」に続く「助詞」は注意して発音すること、③「副詞」や「形容詞」の言葉からは、その言葉のイメージを膨らませて考えることを心掛けるよう指導した。また、歌唱の際に、言葉の意味の塊を区分けし、丁寧に歌唱することも推奨した。特に、「名詞」に続く格助詞「が」「は」「を」の発音は、学生たちが普段から使っている発音とは違うこともあり、注意して発音するように指導した。これらの語は、発音する時に特別な準備が必要である。この準備をするという行為が、実は美しい声を出すための準備として大切である。良い発声とは、身体全体を使った無理のない美しい声であるが、語に意識を持つことで、声を出すことに意識し過ぎず、声を自然に発音するための準備を身体で行い、それにより明瞭な言葉は勿論のこと、お腹で支えられた声、声量の増加といった美しい発声法の技術の修得に繋がるのである。

設問Ⅰは、「音楽2」鼻濁音の習熟度の結果であるが、授業開始時に鼻濁音ができると回答した学生2名(5%)以外では、受講生38名(88%)が授業を受けて技術を習得し、受講生全体では93%が習得できた。できないと回答した学生は3名(7%)であった。平成27年度のアンケート調査の習熟度60%⁵⁾と比較し、効果が劇的に上がった。鼻濁音の技術を修得するために授業で示した二つの方法は、効果があった指導法といえる。

設問Ⅱは、その二つのどちらが効果的であったのかの結果である。特に①の〈言葉の前に「ン」を付けて発音する練習法〉は、受講生全体の86.0%が実施した方法として一番効果があったといえる。この方法でできなかった学生、または自分の感覚にマッチしなかった学生は、②の〈口を閉じて「ン〜」と発音することで、鼻に響くポイントを理解し応用させる練習法〉を受講生全体の14.0%が実施した。できないと回答した学生3名については、これらの指導法では鼻濁音の技術の修得ができなかった。他の指導法を更に研究しなければならないことがわかった。他の方法を実施している学生へは、③〈その他の方法〉として記述した学生1名は、「舌を上あごの奥に付ける」と記述した。これは「ン」を発音する時の舌の位置を明記したものであり、この学生は①の方法を実施と回答している。舌を意識して発音しているということがわかった。

設問Ⅲは、言葉を意識することで〈こどものうた〉を歌唱する際に、どのような影響があるのかを記述させた。問aは、授業を受けて意識が変わったかの調査であったが、受講生の全員43名が①変わったと回答した。歌唱に対する細かい指導を受けたことによる意識の変化といえる。歌唱に限らず、話し方、発音、音色などこれまでに習慣づけられた声の出し方は、言葉を覚え始める乳幼児期より長い年月を経てきている。誰しも、自分の声の出し方に問題があると思いつつながら声を出すことはまずないであろう。他者からの指摘と自覚により、意識的に変われ

るのである。この意識の変化を全員に促すことができたのは意義深いといえよう。

問bは、どのように変わったのかの具体的な記述であるが、授業で何度も注意されて指導を受けた鼻濁音、助詞の発音法など、発音法に関連して記述された内容が多かった。(A)歌う時に歌詞の言葉を丁寧と言うように意識できるようになった」25名を筆頭に、(B)「言葉をはっきり歌えるようになった」12名、(F)「気を付けて鼻濁音にして歌おうとするが難しい」7名、(G)「鼻濁音を意識するようになった」6名など、学生の注意力が歌詞に向いたといえる。(U)「鼻濁音を使用しないガ行のあることをした」1名は、授業で配付した資料⁴⁾も参考に自主学習したと考えられる。また、自主学習の発展形として(T)「歌う前に歌詞を読むようになった」1名の学生がいたこともわかり、歌唱に対する意識が高まったとわかった。

発声法や歌唱法などの技術に関連して記述された内容は、(D)「きれいに歌えるようになった」が9名、(I)「自然な言い方に言えるようになった」が5名、(J)「歌いやすくなった」が5名、(L)「お腹で支えて歌えるようになった」が4名、(M)「滑らかに歌えるようになった」が4名、(P)「発声に気を付けて歌える」が2名、(Q)「のびのびと歌えるようになった」が1名、(R)「言葉を丁寧に歌うことで、息が続くようになった」が1名、(S)「お腹を使うので音程が取りやすくなった」とあり、言葉に注意を注ぐことで歌唱の技術的向上に大いに貢献したことが明らかになった。

歌唱表現法などに関連して記述された内容は、(C)「優しく歌えるようになった」12名、(E)「気持ちを込めて歌えるようになった」8名、(H)「歌詞の意味を伝えられるようになった」6名、(K)「表情豊かに歌えるようになった」4名など、歌唱するという行為が自分の思いを表現するもの、何気なく歌うものから人に伝えるものとして捉えられるようになったといえる。(N)「人の話し方や歌い方が気になるようになった」3名や(O)「普段の会話でも気を付けるようになった」2名という記述は、子どもたちに読み聞かせをする時にも応用の利く技術である。学生は、これらの技術をヒントに、よき保育者になるための学習として自覚していることがわかった。

歌唱が嫌いと回答していた学生2名が、(A)歌う時に歌詞の言葉を丁寧に言うように意識できるようになった」(学生ヒ)、(C)「優しく歌えるようになった」(学生：ネ、ヒ)、(I)「自然な言い方に言えるようになった」(学生ヒ)、(L)「お腹で支えて歌えるようになった」(学生ネ)(O)「普段の会話でも気を付けるようになった」(学生ネ)と歌唱に対して積極的に発言できるようになったということがわかったことも意義深い。

まとめ

保育学科の学生が保育者となった時に、保育の現場で子どもたちに〈こどものうた〉を指導するには高い指導力が必要である。筆者は、そのために、学生に高い歌唱技術を身に付けさせることが大切と考えた。本研究は、美しい日本語で歌唱するための技法のひとつである格助詞〈が〉〈は〉〈を〉の発音法に注目し、言葉を丁寧に発音して歌唱することで、学生の歌唱力の向上にどのような効果もたらされるのかを検証するとともに、学生の歌唱技術の向上に結び付く指導法であるのかを探るものであったが、効果的な指導法の一つであることがわかったといえよう。

鼻濁音は、日本語の響きに美しさを増す。近年この語法は失われつつあり、日常的に使用し

ている若者は殆どみられない。学生が鼻濁音を使用して歌唱できるようになれば、美しい日本語で歌唱できる技術の一つ手に入れるということになる。授業では、筆者の経験をもとに、言葉を丁寧に発音し、意識しながら歌唱するという指導を行った。言葉を美しく表現するという試みは、無理のない発声やメロディーへの感情移入、歌詞に託された詩情へと表現の幅が広がるのである。「言葉を大切に歌唱しなさい」とは、恩師である神田詩朗氏⁶⁾に教示いただいたことである。歌にはメロディーと歌詞がある。音楽の中で唯一言語を有するのは歌だけである。メロディーには作曲家の魂と、歌詞には作詞家の魂が注がれているのである。そのことに真摯に向き合うことで、歌に込められた感情を感じ取ることができるのである。学生たちが、「きれいに歌えるようになった」、「自然な言い方に言えるようになった」、「歌いやすくなった」、「お腹で支えて歌えるようになった」、「滑らかに歌えるようになった」、「息が続くようになった」など、歌唱技術の修得に効果があったという記述が多かったことは、この指導法が有効であったといえるのではないだろうか。また、「優しく歌えるようになった」、「気持ちを込めて歌えるようになった」、「歌詞の意味を伝えられるようになった」、「表情豊かに歌えるようになった」などの記述は、〈こどものうた〉に込められた子どもの世界観を感じ、自分でそれを表現できるまで成長したといえ、保育者となった時に繋がる指導力といえよう。学生は、新しい〈こどものうた〉と出会っても、鼻濁音や格助詞「が」「は」「を」について気を配ることで、〈こどものうた〉を美しく歌唱する方法を手に入れたといえよう。

しかし、それだけで美しく歌唱できる力を有したといえるのであろうか。それだけではまだ足りないと思える。自分の声を客観的に聴くことはできなくても、学生が自分の歌唱について、自己の力で良し悪しが判断できるような指導法の研究を行わなければならないといえよう。また、学生は子どもたちに歌唱の世界観を伝える表現者となる立場であることから、学生自身が感じた〈こどものうた〉の世界観を、的確に表現できる歌唱法の指導法も更に研究を行わなければならないといえる。また、歌唱が嫌いと言っていた学生の理由は、正しい音程で歌えないということであった。この正しい音程で歌えるようになるための指導法の研究も合わせて行っていかなければならないことがわかった。

おわりに

本学の保育学科に入学してくる学生は、意外にも〈こどものうた〉をあまり知らない。幼少の頃のことを忘れているのか、または歌うことをそれほど多くは経験しなかったのか、世代の違いも一理あると思われるが、「音楽2」の授業で取り上げる〈こどものうた〉を初めて習うという学生が多い。『赤い鳥』⁷⁾に始まる童謡運動以来、一流の音楽家と詩人たちが子どもたちのために多くの作品を作った。これらの歌は、平易な言葉とメロディーからできており、幼い子どもでも歌唱できる作品になっている。作曲家や詩人は安易に作品を作るのではなく、子どもたちのための作品だからこそ、誠心誠意をもって作品を作ったのである。ゆえに〈こどものうた〉は美しい言葉、美しいメロディーがちりばめられており、心に残る名曲が多いのである。

そんな作品を子どもたちに伝授する対場は保育者であり、これらの作品を子どもたちの心に残るように指導できたのなら、子どもたちの豊かな感性を引き出す力の手助けをすることができるだろう。幼少期に覚えた〈こどものうた〉は、人生の中で三度楽しむことができる。まず一度目は、乳幼児期に保育園や幼稚園、保護者から教わった〈こどものうた〉である。歌を

歌う喜び、言葉を覚える喜び、表現できる喜び、これらは子どもの成長になくなくてはならないものである。二度目は成人となり保育する立場となった時である。子どもへ歌を歌ってあげる喜びは、自分の過去とも相まって豊かな感情がわき上がる。三度目は老齢期である。幼い頃に覚えた歌は幾つになっても忘れないものである。たとえ身体が若い頃と比べ不自由な部分が増えてきたとしても、幼い頃に覚えた歌はメロディーが流れれば自然と口ずさむことができる。また、歌唱していた当時が思い出され、脳への刺激は測り知れないといえよう。保育者は、その一番大切な一度目に〈こどものうた〉を子どもたちに届ける役目を担っているのである。

ゆえに、〈こどものうた〉を一曲でも多く覚え、子どもたちに多くの歌を歌ってあげられる保育者、子どもたちの記憶の中に根付かせてあげられる保育者となってほしい。

保育者となる学生の歌唱技術の向上を図ることは、保育の現場で子どもたちの歌唱指導に役立つだけでなく、保育者としての表現力にも有効であることから、今後も〈こどものうた〉の歌唱技術の習得に効果的な指導法の研究を行っていきたい。

脚注

- 1) 「日本人声域に関する研究」博士論文 九州帝国大学1938 ID:000000188374。
- 2) 河合玲子 2015: pp300図1、2016: pp264図1。
- 3) 河合玲子 2015: pp304図2、2016: pp265図2。
- 4) 金田一春彦監修『新明解日本語アクセント辞典 第2版CD付き』三省堂(2014) ガ行鼻音についての解説 pp23。
- 5) 河合玲子 2016: pp265-266。
- 6) 声楽家、教育者。愛知県立芸術大学名誉教授。
- 7) 鈴木三重吉が主宰した児童雑誌『赤い鳥』(1918-1936)、西條八十、北原白秋、成田為三、山田耕筰等が作品投稿。

参考文献

- 金田一春彦監修『新明解日本語アクセント辞典 第2版CD付き』三省堂(2014)
- 金田一春彦『日本語の特質』NHK出版(2009)
- 金田一春彦『日本語 新版(上)』岩波新書(2012)
- 金田一春彦『日本語 新版(下)』岩波新書(2013)
- 金田一春彦『童謡・唱歌の世界』講談社学術文庫(2015)
- 工藤浩 他『改訂版 日本語要説』ひつじ書房(2015)
- 斎藤純男『日本語音声学入門』三省堂(2014)
- 広島市立中央図書館「鈴木三重吉と『赤い鳥』の世界」<http://www.library.city.hiroshima.jp/akaitori/> (最終アクセス2016年9月17日)。
- 四谷文子『日本歌曲の歌い方』音楽之友社(1981)
- 大賀寛『美しい日本語をうたう』カワイ出版(2014)
- 加藤友康『こへの知識 のどを大事にしたくなる本』鳩の森書房pp49-116(1979)
- 酒井 弘『発声の技法とその活用法』音楽之友社pp99-100(1979)
- 長田淳一郎『音声学の基礎 発声の知識』音楽之友社(1975)
- 中尾和人『うたい方のヒント-ことばを考える-』音楽之友社(1981)
- 河合玲子「日本語唱法の研究-鼻濁音Ⅰ-」名古屋女子大学紀要第61号人文・社会編pp297-310(2015)
- 河合玲子「日本語唱法の研究-鼻濁音Ⅱ-」名古屋女子大学紀要第62号人文・社会編pp261-272(2016)

